

内視鏡診断学の進歩、特に ERCP の開発や PTC の普及によって、近年、診断面で著しく関心を引いてきた疾患の 1 つに膵・胆管合流異常と先天性総胆管拡張症がある。本誌の胆道・膵シリーズの中で、特に新しい分野に焦点を当てたいという意図により、本号の特集にこれが取り上げられた。

春日井博士による序説は、この疾患の歴史的概観より診断・治療に至る臨床的問題点が文献的にまとめられており、この疾患を考えるうえでの手引きとなるであろう。そして、わが国でこの疾患を数多く経験しておられる中沢博士、古味教授、中島博士らによる旧来の Alonso-Lej の分類に対する独自の分類の提唱、膵・胆管合流異常に関する知見の報告、またこの疾患での高頻度の癌発生の原因に対する考察などは、この疾患の成因の解明、病像の分析の面で、まさに世界をリードする業績と言いうものである。また、小児についての小児外科の宮野博士の論文も、小児と成人におけるこの疾患の関連性を知るうえで有益であろう。

その他、関連症例はいずれも鮮明な写真により、本疾患のモノグラフとしての役割を果たしており、また各施設のエキスパートによる座談会では、細かい点まで突っ込んだ討論により、名称、診断の規準などについて、主題論文と共に読者の理解を一層深めることと思われる。

この号が発行される頃は、読者諸賢には米子や熊本の学会を終えて、なお幾つかの学会を控えて頑張っておられることであろう。御奮闘を切に祈念する次第である。

<信田 重光>